

||||||||||||||||||||||||||||/2001.12.12

|||||||||-☆-H.A.L.'s Circle Review-☆-|||||||||

||||||||||||||||||||||||||||/No.0242-

<http://www.dynamicaudio.co.jp/audio/5555/7f/circle.html>

***** What's UP *****

いやはや、今回の配信は 100%私の手作り!? 皆様からの投稿ではなく、
久々に時間をかけたハンドメイドの情報となりました。(肩コリコリです~(~_~))
ちょっと長い文章ですが、これは web site には上げられないエピソードです。
ご一読頂ければわかりますが、何と 300 万円の商品に対する…あと 60 万円を
追加するかどうか…という手厳しい判断になってしまったからです。

私は自分に嘘をつけないもので…、そして自分に嘘がつけないユーザーが
選ぶのが“ハイエンド・オーディオ”なのです!!

Head Line |||||||||||||||||||||||||||

【早版⇒H.A.L.'s short Essay】

小編『音の細道』 ハルズサークル会員のみ公開の特別寄稿

【Editor's Column】

||||||||| 「早版⇒⇒⇒⇒H.A.L.'s short Essay」

「両極 N/S の対決が見せてくれたものは…!?」 作 川又利明

1. 「本当の比較とは」

新製品が御目見えするたびに「前作を遥かに凌ぐ…」とか「以前にも増して…」
というような表現を雑誌でよく見かける。色々な輸入商社からも、今度の新製品
を「～～先生に聴いてもらったら前作とは比べ物にならないと絶賛されまし
た」と話しを聞かされることがある。

確かに新製品を表現するのに前作との比較は同社比較ということで、読者にも
わかりやすいし販売促進には近道と言える表現方法なのであろう。しかし、
販売をする立場からは前作を購入されたユーザーの皆様に対しては、極力
価値観の低下が感じられないようしたいものである。前作を踏み台として
新製品を売り込むという図式は避けたいものなのである。

しかし…、二、三年前に発売された“前作”を記憶の中で呼び起こし、眼前に
置かれた新製品の音質をそれと比較して述べるという超人的なことが果たして

人間に出来るのであろうか…? ましてや、前作を試聴したシステムや環境もまったく違うというのに、そこまで言い切れるのであろうか。

持ち込まれた新鮮品の音質に私が異を唱えると、輸入元のある担当者は…。

「だって、川又さん、～先生も某誌の編集者もみんないいって言ってますよ」と述べられる。でも、私は納得いかない。それを説得しようとしても、製品の音質を私がこのフロアで散々チューニングしてもダメなものはダメなのである。

私は相当偏屈なのか、あるいは自信過剰なのか、あるいは現実主義者なのか? これまでにも何回も経験してきた新製品に対する判定は、私がこしらえた環境とシステムに組み込んで、新旧両方を並べて同時比較しないことには納得できないのである。

外観が大して変わらない Mark Levinson の歴代モデルと “S” が付くバージョンとの違い。そして、wadia の歴代モデルとそのバージョンアップの進化。

更には、ご存知 Esoteric の P-0 と P-0s との違い。面白いところではコニサーのウッドバージョンとメタルバージョンの違い。

などなど、振り返ってみれば数え切れないくらいの実地による比較試聴によってのみ、私は新製品の実態を評価してきたものであり、幸いにして同席された一部のユーザーはそれを体験してきたというエピソードがある。

その私の一種のこだわりとわがままが、また新しい発見と感動を導き出すことになったのである。さて、今度の実地比較の対象とは何か…!?

2. 「事前情報の信憑性と推測の領域」

もう、皆様もご推測のことと思うが、9月21日に初めて体験した B&W の Signature 800 の姉妹機 Nautilus 800 の両者の違いをいつかは確認したいというのが私の願いであった。

http://www.marantz.co.jp/ja/prod_ce/bw/s800/index.html

http://www.marantz.co.jp/ja/prod_ce/bw/n800/index.html

何といっても、その後に開催されたインターナショナル・オーディオショーで来日された B&W の開発者も「同じ部品を使っているので音は同じ」というコメント、そして輸入元の担当者も「違うはずだけど…」と明確な答えを述べることはなかった。

仕上げの違いだけ、それだけで 60 万円という価格の差を納得して販売すればよいのか? 「同じなら同じでそのように説明が出来る。しかし、本当に音質が違うのであれば、私は責任あるセールスをしたことにはならない」

さて、どうするか…。

そこで、輸入元に対する交渉力というか、私の要請の根拠を理解してもらい遂に、2001年12月にSignature 800(以降はS800と表記) vs Nautilus 800(以降はN800と表記)がここで実現したのである。

まず、見た目の高級感はいかんともし難いほど両者の存在感を引き離す。Signature 800を最初から見てきた目からすると、N800の仕上げは従来から同シリーズで馴染みとはいえ何とも寂しい限りなのである。

その仕上げのみが違うという両者に対して、私は以下の推測をしていた。

- 1) S800はウーファーの周辺もレザー張り、N800はMDF製のフロントバッフルということは、ウーファーの放射に含まれる中高域の信号はN800の方が反射しやすい。そしてS800はそれよりもダンプ効果がある。従って、ウーファーの担当するレンジの上の方はN800の方が華やかあるいはエネルギーに聴こえるはず…。
- 2) 前述のフロントの仕上げはミッドレンジとトゥイーターの放射にも影響があるはず…、ということは、同様な推測からN800の方がフロントバッフルの反射が発生しやすいので、S800よりも中高域のエコー感などは補足される、あるいは増長されるのではないか。
- 3) グレー・タイガーアイのS800の仕上げはバフをかけて何回もコーティングをしているというが、芯材は同じなのだから表面硬度が多少違うといってもN800とのそれとの違いは大差ないのでは。表面の硬さによって違うものがあるとすれば、高域側の印象だろうが、S800に比べてN800の表面の方が微妙に硬度が低い、つまり極論を言えば柔らかいと推測するならば、かえってN800の高域の方が聴きやすいのではないか。

これが、私が考えに考えた仕上げの違いのみによる音質差の根拠として推測していた両者の「違い」の方向性である。

3. 「予測の完全否定」

さて、11月30日の金曜日、一般の皆様には12月1日からと告知していたのは、私が一人でじっくりと試聴する時間を事前にとおきたい、そしてご来店の皆様にはよいポジションで試聴して頂きたいという配慮からであった。

使用システムは P-0s から GOLDMUND MIMESIS 21 同 MM22 Millennium Evolution pre amp 同 Millennium mono power amp という布陣である。

最初に両者を等間隔に置き数曲 N800 を聴いてみる…???

「ちょっと待ってよ!? どうして…?」と疑問の声が上がる。違う…
違いすぎるるのである。耳を疑う相違点に「こりあ、中途半端なことを
しちゃいけないぞ。やり直しだ」とセッティングまで完全に同条件に
しなければ後悔を残す…、いや私の判断が狂ってしまってはいけない。

私の比較試聴の方法はいたって単純明快であり、かつ手間がかかる。
一曲のあるポイントを聴き、それを何度も繰り返し、特定の演奏箇所
の観察する楽音を何回も繰り返して記憶にすり込んで行く。そして、
その演奏を比較する他方で忠実に同じボリュームで再度聴くのだ。

従って、私はオリジナル・ノーチラスのホームポジションにセットした
S800 とまったく同じ場所に N800 をガラガラと入れ替えて、スピーカー
ケーブルをいちいちつなぎかえるという原始的な方法で、しかし
これ以上の同一条件はないという手間のかかる方法を実行したのである。
これを一曲ごとにやるのだから大変だ。

最初の一曲 YO-YO MA 「シンプリー・バロック」(SRCR-2360)

N800 で最初にこれを聴いた時には私は自分耳が風邪をひいて??しまった
のではないかと疑ってしまった。鮮やかさがない…、もちろんこれは
S800 との相対比較であって、N800 自身が情報不足だとは言わない。

確認のためにガラガラとまたしても手間をかけて S800 と入れ替える。
「やっぱりそうだ～!! 間違いないぞ!!」 そうなんです、こうすると
鮮明さが戻ってくるのである。アムステルダム・バロック・オーケ
ストラのヴァイオリン、チェロ、そしてチェンバロ。各々のオリジナル
楽器の放つ芳香のような余韻は、その渋さと相まって MA の演奏を
背後から当てる照明のようにセンター第 167 番「人々よ、神の愛を
たたえよ」に光りを投げかけていた。

ところが N800 で聴くと、スライド式の調光器を指でスーッと引き下げた
ように演奏全体の明るさが減少してしまうのである。これは単純に
イコライザーで高域をロールオフしたというような極端な周波数特性
の変化ではなく、ごく微量な…、しかし、聴く人によっては大変大きな
変化をもたらすのである。そう、鮮やかさと余韻感の減少という言葉
が妥当かもしれない。

ごくわずかにスモークが入ったフィルムを写真に重ねて見るような

感じなのだ。「おいおい、予想とはまったく逆じゃないか!?」

私は前述の 2)で推測していたように、N800 はフロントのレザー張りの面積は S800 よりも少ない、そして MDF の木材質が露出している面積が多い分だけ反射効率もいいはずで、その分華やかになるものと思っていた。しかし、実態はまったく逆なのである。

その辺の推測は今度は 3)で述べている表面仕上げの硬度ということ

ことが、この質感の違いを説明してくれることになるのだろう。

つまり、電気的、音響的特性が一緒のトゥイーターが放射した音波がスピーカーのボディ一周辺を回折しながら伝播していく過程で、S800 の光沢感があり硬質なグレータイガーアイの仕上げによる表面が正確に高域のエネルギーを空間に送り出していくのだろう。

そして、N800 は同様な高域のエネルギーをボディーの周辺で摩擦熱

に変換してしまうように、その明るさの減衰を考えるとエコー感を

希釈するように空気中に拡散してしまうのである。「ああ、何たる

誤算であることか…」演奏会場の照明が N800 は 60W であるのに対して

S800 は、そう!! 100W の電球に換えたときの明るさの変化と言える。

確認の二曲目 大貫妙子「アトラクション」の「四季」(TOCT-24064)

さあ、一曲目で「予想おおはずれ」の衝撃もさておき、再びガラガラとスピーカーを入れ替える。N800 で聴きなれた大貫妙子を聴く。

「えっえー、そんな～」というため息が出そうなほど、昨日までの S800 との相違が瞬間に認識される。この曲の絶品とも言えるエコー処理によって天井に向けて後方へと拡散していくヴォーカルの余韻が、尻尾の重たい紙飛行機が滑空の途中ですとんと落ちてしまうよう空中からいなくなってしまうのである。「まいった～」と言。

さあ、忘れないうちにスピーカーを取り替えよう!! ガラガラ…。

S800 でまったく同じボリュームで再度大貫妙子をかける…。

「おおー、やっぱりそうだよ!!」か細いゴム動力を備えたライトプレーンが肉眼でも見えるほどゆっくりとプロペラを回転させて空中を漂っていくように見事なエコー感がよみがえってくる。

だって、S800 のレザー張りは中高域までダンプするはずだから、響きの残照は絶対 N800 の方がきれいだと思っていたのに…。

いやいや、表面積が圧倒的に大きいボディー全体の仕上げと硬度の方が影響力は大きかったのである。S800 のエコー感の維持、発展性、再現性、私が求める情報量の絶対値は何と言っても S800 が上だったのである。

意外な三曲目 「Guitar Fingerstyle 2」(50772 Narada)

では、S800 のレザー張りがダンプ効果を持っているはず…という推論をどのように確認したらいいのか!? そこで次に選曲したのがこれ。

強烈なアタックのアコースティック・ギターの録音で、その鋭角な立ち上がりと、サウンドホールの響きの生々しさを試してみたくなった。

さて、またスピーカーの交代だ…。こんなこと営業中にガラガラやっているのだから、私も物好き、あるいは凝りすぎ、あるいは自己満足!?

さて、最初に N800 でいくぞ!!

「えっ、ちょっと待って、何か不純物が混入しているのでは…!??」 そうなんです。随筆にもあるように、昨日まで S800 で聴きなれていた耳からすると、N800 でのギターの立ち上がり後の瞬間にちょっとストレスを感じてしまう。極端に歪んでいるとか、ざらついているという表現を使ってしまうと N800 に申し訳ないので控えるが、純粋無垢を S800 だとすれば何かしら混じりけがあるという違和感がある。

「よし、確認だ!!」 またガラガラと S800 にスピーカーを置き換える。そして…「おー!! やっぱりそうだよ、間違いない」と自分の分析の裏づけが取れたという喜びがわいてくる。

このようなアタックの鋭い楽音では S800 に間違いないダンプ効果があることを確認できる。逆に N800 では、ギターのアタックが発したスチール弦の硬さのみが誇大表示されるようだ。妙に光りが強く思わず目を細めてステージのギタリストを見ているようであるが、S800 では適度な光量でまぶたに力が入ることなく目を見開いてギタリストのテクニックを観察できるのである。これは違う!!

曲を変えることで未解決であった上記の 1)がこれで証明された。アタックと瞬発力を求められる楽音に対しては S800 のレザー張り仕上げは明らかにエッジのぎざぎざを取り除く効果がある。そして、ヴォーカルや弦楽器のような継続して発せられ余韻感を大切にしたい録音に対しては、レザー張りの表面を指で押し込んで…と言うよりも、そこまで圧力を加えることなくレザーの表面で軽~く中高域の音波を心地よく跳ね返してくれるような感触が S800 にはあるのである。

4. 「良心的解釈とユーザーへの提言」

いやはや、同じ性能のパーツを使つていながら、これほどまでに違いがあるとは思いもよらなかつた。しかし、B&Wの人たちは基本的に音質は同じと言つてゐるが、これには二つの解釈ができるものと私は考えた。

まず、そのひとつはB&Wという企業の自社の利益。
S800の仕上げの工程は素人目に見ても複雑であり手間隙がかかる。
それは生産性の悪さを受け入れてもB&Wの技術者たちの理想追求の姿勢を製品に反映させたものであるということ。それを前提に、
従来の800シリーズと同じ塗装のN800の方が量産的には作りなれて
いるところがあり、生産性と数の販売では有利にたつものがある。
従つて、シンボルとしてのS800をイメージ付けして、価格的にも
お安く量を販売したいN800の価値観を同じ音質としてアウンス
するということである。つまりビジネス本位の考え方である。

そして、次の解釈としては、B&Wの研究室では本当に同じに聴こえた
ということである。そもそもアンプ、CDシステム、ケーブル、ラック
などと、どれをとっても私のこだわりと調整によって実現している
このH.A.L.の環境は恐ろしいほどにコンポーネントの本来の姿を
映し出してしまう。

そう、私の理想は…。海外のハイエンドオーディオのメーカーの
試聴室を上回る音質での演奏!! なのである。

従つて、スピーカーを設計する段階で使用しているエレクトロニ
クス他の環境も、そこを上回る状態を実現している。
アンプを作つてゐるメーカーの試聴室で使用しているスピーカー
よりも情報量の多いスピーカーで彼らのアンプを評価する。
CDプレーヤーやD/Aコンバーターのデジタルコンポーネントを
設計しているメーカーよりも良質なケーブルとセッティングを
追求する。

つまり、あらゆる分野で最高レベルのコンポーネント、ケーブル、
ラックを含む環境などを実現したいと努力しているのである。
何を言いたいかというと、大変恐れながらB&Wの試聴室の総合的な
環境がこここのレベルに達していないために、デリケート?な違いが
彼らの研究室では発見できなかつたのである。実はこれは意外に
他のメーカーの新製品でも同様なことがあり、設計した当人が
ここで試聴して初めて気がつくこともしばしばあったのである。

さて、今まで S800 を展示してからというもの、来店されたお客様から一番多かった問い合わせ、「あの～、仕上げが違う N800 とは音は違うんですか??」という質問に対して、私は今回の貴重な体験を通して明確な答え、あるいは自己主張が出来るようになったのである。

「はい、違います!! そして大変に…」

この N/S の両者を並べて比較していた三日間に幸運にも、そして熱心にも来店されたお客様の支持率は 100 パーセント S800 であつたことを最後に追記しておく。

そう、ここ H.A.L. で聴けば誰でもわかってしまうのである。
そして、皆様の後悔を生まないように私は取得した情報と評価、そして
判定結果を素直に言葉にしていくことであろう。

ご予算で妥協する…、60万円の節約…、お客様の満足感…、どれも本物を知っている人間であるからこそ、間違いのないガイドラインをご提供できるというものです。

ガラガラ…、この作業の繰り返しをがんばった甲斐がありました!!

お楽しみ頂けましたでしょうか。そして、一般公開がはばかられる理由もご理解頂けたかと思います。私が S800 を語った隨筆はもう間もなく私が担当するサイトで一般公開できるようになって来ましたが、今更ながらこの隨筆で私が評価してきたことを再確認したと言うことなのです。

しかし、今回の私の実体験と分析を同様に公開することはメーカーと輸入元の利益に直接関係してきますので（あつ、もっとも S800 がより多く売れば貢献したことになるのかしら!? (^^ゞ) あくまでもハルズサークル内部での情報として頂ければと思います。私は嘘つきません!!

皆様、 その辺をよろしくお願ひいたしますね!! <m()m>